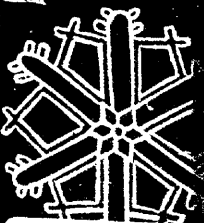
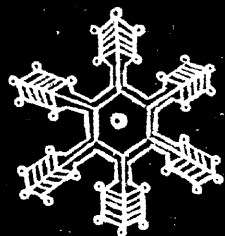
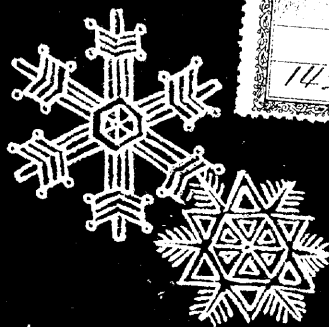


單級

日本修身書

甲篇

卷二



檢定申請本



K120.1

68

2

單級

日本修身書

甲篇

甲篇卷二目次

第	一	二宮尊徳先生(一)	一
第	二	二宮尊徳先生(二)	二
第	三	二宮尊徳先生(三)	三
第	四	二宮尊徳先生(四)	四
第	五	花咲爺(一)	五
第	六	花咲爺(二)	六
第	七	二宮尊徳先生(五)	七
第	八	二宮尊徳先生(六)	八
第	九	二宮尊徳先生(七)	九
第	十	二宮尊徳先生(八)	一〇

一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

第	十一	女徳	一
第	十二	鈴木今右衛門の女	二
第	十三	約束	三
第	十四	蟻ときりぎりす	四
第	十五	鹽原多助(一)	五
第	十六	鹽原多助(二)	六
第	十七	公德	七
第	十八	森蘭丸	八
第	十九	松崎大尉	九
第	二十	皇恩	一〇

一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一



甲斐 卷一  
二  
文 學 社

だい一

にのみやそんとくせん  
せい は、がくもんを、  
このまれました。

たい二

そんとかせんせい  
は、おやに、こーこーを  
せられました。



甲斐屋

甲斐屋

三

大

土

だい三

そんたくせんせい  
は、ふたりのおとうとを、  
かはゆがられました。



新日本修身書  
卷二  
六  
學

だい四

そんとくせんせいは、あれち  
にあぶらなをまいて、その  
みをとられました。



だい五

ぢぢが、いぬをかはゆが  
りました。

いぬが、こがねのあると  
ころをしらせました。





だい六

ぢぢは、かれきにはな  
をさかせて、とのさま  
にほめられました。



だい七

そんとくせんせいはいちひ  
さいときからなさけぶ  
かい人でありました。



だい八

そんとかせんせいはおんを  
うけては、かならず、かへさう  
とつとめられました。



だい九

そんとくせんせいははつと  
りのいへのために金  
をためて、やられました。



だい十

そんとくせんせいはいでんぢ  
をひらきていんもつを  
つくることをすめられ  
ました。



だい十一

そんとくせんせいはいしんで  
のちかみにまつられました。

よおしよには、

よきむくいがある。



だい十二

なにごとも

つとむれば

なる。



だい十三

たべものを、すごすな。  
のみみづに、きを、つ  
けよ。はやりやまひを、  
かくすな。





だい十四

いなふはるは、ころだて  
よき女で、ち、は、に、  
こーこーをつくしました。



だい十五

おんなは、なにごと、も、や  
さしくせよ。ことばづかひ  
あひさつなどは、すづて、  
ていねいにせよ。



だい十六

人のよしあしはまじ  
はるともにてわかる。  
よきともにまじはれ。



だい十七

ちりつもつて山となる。

わづかのものをもそま

つにするな。



新編 日本修身書 卷二 文學 社

だい十八

へいたいになることと、  
せいぎんををさむること  
とは、われくのつとめで  
あります。



だい十九

まつぎきたいはにほんとしなと、いくさのときはげしいたふかひして、うちじにせられました。



新日本修身書 卷二 孝 社

だい二十

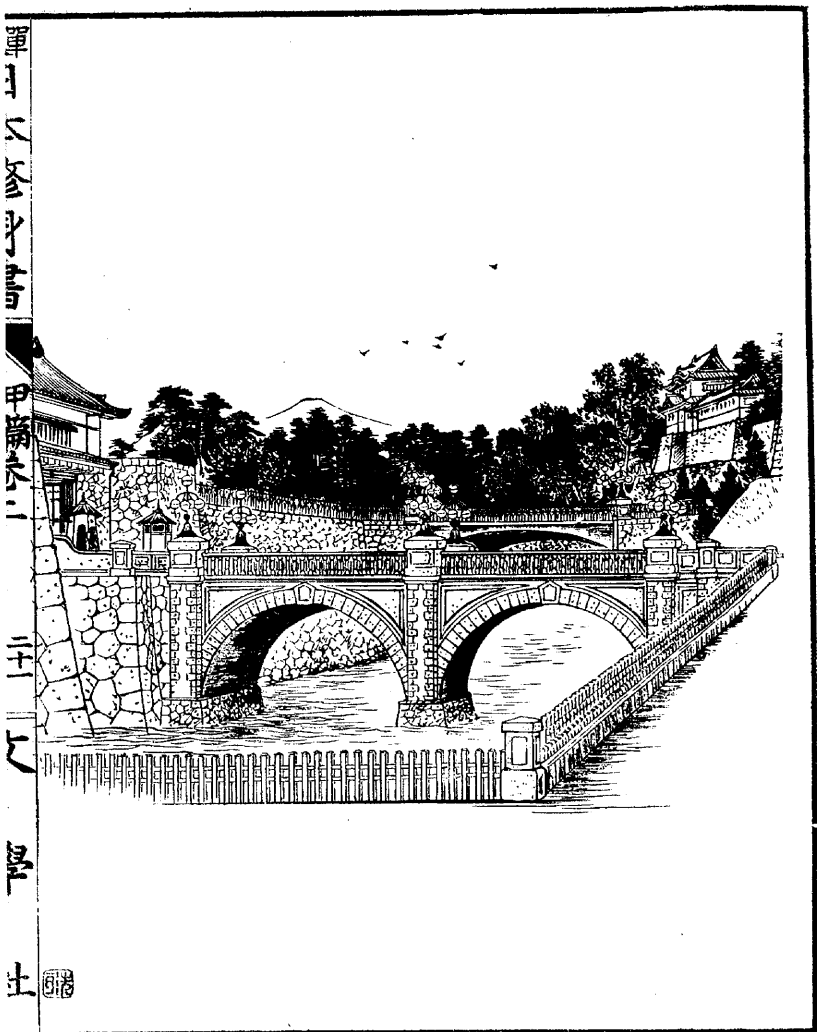
きみがよは

ちよにやちよに

さざれいしの

いはほとなりて

こけのむすまで



軍門ノ家ノ書

甲斐守

三

七

等

本

をばり

明治三十四年十月九日印刷  
明治三十四年十月十二日發行

文學社編輯所編纂

發行兼印刷者 小林 義 則

發兌 文學社

印刷所 文學社工場

賣捌所 各府縣下特約書林



定價	
甲編	各九錢
乙編	各九錢
各拾貳錢	各拾六錢

東京市日本橋區本町四丁目十六番地

東京市神田區錦町三丁目一番地



